伊地知文庫
文庫20
45

寛文十二子年ヨリ
今年明治四十四辛亥年迄　弐百四十年目ニ当ル

唐何

遠くより客やしるらん園の梅

世とともにひさしき庭の柳かな

時代の春のあるじや雨にて

うちあるく風を家しも皆

月代や松山の陽と到るらん

庭の音遠く禁田の原

秋のひ方とまるや村雨

垣根のそとにくれ来

伊地知氏書册

干時寛文十二壬子年青旨

更画子 雅元

二

永日小巷人と字治の朝
ゆくへといふあや惜りて過
行事をたなそこにして住山の奥
ちろとまもりすむ
野辺や草ふかき秋の
あらし〳〵の松風
海棠等小菜の
岩もと駒そそあら
白きや都うつり
張しなくさむ
月の花し松
経たるあり
傾ける月の下
杯完乃家や

何色

花の風艸へさそはれ別る
海さへはるゝ春書おくり
八重かすむ瀬越そだゝ舟出て
浦梅の波よ雨宿りせん
村雨や雲しの滝の滝つ瀬を
抔くみけり神の湯つぼ
蛸釣の志のまゝ有明に
小山の夢やさそはし

氣ちて鳴ようぐひす
行と今いふ間に蓮生ふけ
待宵小夜のふりし花一木
家めぐりして雨ぞ降ける
谷の戸と閉つゝ淀君閉籠て
なう務てそ有ける
姫海て来し四方や作りし
此里人の幸古ふるき

愚里雲井七句

菅長二

二

村雲に入て幸と越のくん
花すくんの外と都れの
一月の雪せとやはらの笹
さくさくとふるきみと野のん
碑と狂れ野すきちちや
深を出くい高ん布卿
人座の名いつかい神ま
むこうよいタ笹の入を

木之向
長二

才三

何風

越そふ山郭
ありひさ月雨の比
かくる面の里極めん
注遠志けさ里くのを
志そに草と休め浅し来
多いうもあき川つ
岸ふる浪月ふそ
柳とらす風の海さ

三

十九句

長安

才七

朝何

二

岩根のさくへ暑日
外山を滝の落
掛とそ小川の
庵いおれと人
枕を海
なとうそ
ふそし九し去年
欲うさ〳〵や

三十三句
長二

第八

一字或跡

秋
草
夕雪
聖
浅沢の海

廿三句
長二

才文

花何

何木

才十

白何

今年ことし二月きさらぎ
神ぢ雨ぬ
末ゐ狂ふ
ふつつの物
かく雨
乃ち
月ぬ
ぞ
文添く
花と
吹
おうた
牡丹の
ぬ